

『悦目抄』三本における仮名文字遣いの実態

—〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉について—

佐々木 勇

〇、研究の目的と対象文献

本稿の筆者は、『悦目抄』三本における仮名文字遣いの実態——〈ホ〉〈ン〉〈ケ〉について——〔論叢 国語教育学〕15号、二〇一九年七月。以下、前稿と呼ぶ〕において、音節〈ホ〉〈ン〉〈ケ〉¹では、『悦目抄』に記された仮名文字遣い法が『悦目抄』内で実践されていないことを述べた。

一方、対象とした『悦目抄』三本においても、『悦目抄』に記された仮名文字遣い法に合った書写がなされた音節も存することも記し、詳しくは稿を改める、とした。

本稿は、予告した続稿である。

土肥（二〇一九）²は、亀井本『新撰仮名文字遣』江戸初期写本の音節〈カ〉〈シ〉〈ツ〉〈ナ〉について、当該書中に記した異体仮名の使い分け法通りの仮名文字遣いが実践されていることを指摘した。本稿は、それを遡る時代の『悦目抄』において、土肥論文が問題とした音節〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉について、記された仮名文字遣い法が

『悦目抄』本文全体で実践されているものか否かを調査・考察することを目的とする。ただし、〈シ〉は、『悦目抄』の「大方書たかへてあしかるへきかなの事」が「志」を探りあげず、「し」も「上下不分」としているため、本稿の対象外とする。

対象とする『悦目抄』は、前稿と同じく、左の室町時代写本二本と江戸初期刊本一本である。

①書陵部蔵室町中期写本（150函734号）、②内閣文庫蔵室町時代写本（特102-0011）、③正保二年（一六四五）刊本。

①は新日本古典籍総合データベースでの公開画像、②は原本調査および国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像、③は国会図書館蔵本（857-31）の公開画像に依る。

一、研究の方法

次に、現存最古の『悦目抄』写本とされている、書陵部蔵室町中期写本『悦目抄』（150函734号）の「大方書たかへてあしかるへきかなの事」のうち、〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉の記事を掲げる（当該条で問題とされ

ている合点付きの仮名を「」で括った。また、字体を区別するために字母に戻したものがある。

下に不書「か」

下に不書「つ」 上下を不分「徒」「川」

下に不書「な」 上下を不分「奈」「那」

本稿の対象に定めた音節〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉について、右の記述通りの仮名文字遣いが「悦目抄」中で実践されていれば、次のように書写されているはずである。

〈カ〉 「か」——「下」に書かない。

〈ツ〉 「つ」——「下」に書かない。

「徒・川」——「上下」ともに書く。

〈ナ〉 「な」——「下」に書かない。

「奈・那」——「上下」ともに書く。

この「上」「下」の意味は、未詳である。本稿では、先行研究に従い、現代の一般的な古典文法における単語の語頭・非語頭として、それぞれの仮名字体を分類する。一語の認定は、『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇〇—二〇〇二年、小学館)に依る。

ただし、前稿同様、付属語・接尾語は直前の語と、接頭語は直後の語とともに一語句として採る。そのため、「上」「下」を、「語句頭」「非語句頭」として整理する。

しかし、後述するとおり、前稿に合わせたこの「上」「下」の基準は、書写者の認識とずれていることが本稿の検討から知られた。そのため、後に修正する。

二、「悦目抄」三本における仮名文字遣いの実態

1. 〈カ〉

①書陵部蔵室町中期写本「悦目抄」(150函734号)

本資料の〈カ〉全例を、語句頭・非語句頭の観点で分けると、次の数となる(助詞・助動詞を単独で記述している「かも すもら し」などよめるは)の部分は、対象から除外した。

表1

	語句頭	非語句頭	計
可	136例	424例	560例
か	66例	11例	77例
閑	11例	1例	12例
ケ	9例	0例	9例
計	222例	436例	658例

右のごとく、〈カ〉を表記する基本の仮名字体は、「可」である。

ア. 「か」

「か」は、「下に不書」とされるとおり、語句頭例が多い。

しかし、「下」に書く例も11例存する。左のものである(語の意味を示すために、「」内に漢字を充てる。以下、同じ)。

a. とてもかくても「斯くても」(50ウ6)、ふみ分かたし「難し」

(11ウ3)、たえかたく「難く」(61ウ4)、ともから「輩」(1ウ2)。

b. やさし「優し」かへし (11ウ4)。

c. は、かり「憚り」(15オ2・50オ8・52オ5・52ウ1・43ウ5)、さから可山「相楽山」(51ウ6)。

a. の四語は、土肥論文の「形態素頭」にあたる。

非語句頭例 b「やさしかるへし」は、カリ活用形容詞語尾の頭である。この書写の実態から、カリ活用形容詞語幹と活用語尾とは別語である、あるいは、カリ活用形容詞語幹は独立性が高い、と書写者が判断していたと解釈できる(次述②内閣文庫蔵室町時代写本にも、類例が見られる)。

植(一九七九)⁴は、定家の仮名字文字遣いから、「美しかり」ならば「美し」「かり」の二語と定家は考えていたのではないだろうか。」としている。本稿の筆者も、カリ活用形容詞の活用語尾が行頭から書かれる割合が、行頭と語頭とが一致する他品詞語の割合とほぼ等しいことから、カリ活用形容詞の語幹と活用語尾との間に、単語と単語との間と同じ切れ目意識を正徹(一三八―一四五九)が持っていた、と述べたことがある⁵。

c「は、かり」は、踊り字に続けて基本の仮名「可」を用いると一画目に、を打つ仮名「可」と誤読されるのを恐れ、「か」の字体が選択された例であろう。本資料中に、「は、可り」の例は無い。

c「さから可山」は、(カ)の「可」が下接するため、同一字体を避けたものかもしれない。

右のごとく、厳密な適用ではないものの、「下に不書「か」は、

実行されたことが認められる原則である。

イ. 「閑」

「閑」も、語句頭での使用に偏る。左に、全例を掲げる。

【語句頭例】(11例)

閑たかるへし(1ウ4・22オ7)、閑、けて(62ウ4)、閑、らて(8ウ3)、閑、りて(30ウ3)、閑く(44オ2)、閑くて(6オ2)、閑さらされは(13オ2)、閑たはら(64オ7)、閑ならず(24ウ3)、閑ひなく(6ウ8)。

【非語句頭例】(1例)

い／閑てか(53オ5)。(改行を／で示す。以下同じ。)

「閑」の非語句頭一例は、行頭であるための異例であろう。植(一九七九)も、行頭・行末に特定の仮名字体を使用される事実を指摘する。小松英雄(一九九八)は、一語が二行にまたがって書写される場合、二行目行頭に、「ハイフンと同じ機能で」有標の字体を用いる、とした⁶。

ウ. 「ケ」

【語句頭例】(9例)

ケ様(9ウ5・11ウ5・16オ6・23オ1・28オ1・38オ3・43ウ1・53オ7・54オ6)

【非語句頭例】(ナシ)

「ケ」の字体は、「ケ様」「斯様」にのみ使用されている。

以上、語句頭や・特定語であることを積極的に示す必要がある、と書写者が判断した場合に、「か」あるいは「閑」「ケ」が使用されたもの、と考えられる。

②内閣文庫蔵室町時代写本『悦目抄』（特102-0011）資料①と同様に整理すると、左の表2となる。
 なお、本資料に「閑」「ケ」の使用例は無い。

表2

	語句頭	非語句頭	計
可	215例	457例	672例
か	6例	4例	10例
計	221例	461例	682例

右のとおり、本資料でも、〈カ〉は大部分「可」で書かれる。

「か」は、左の10例である。

【語句頭例】（6例）

かく「斯く」（36オ1）、かくし「隠し」題（44オ3）、かける「書ける」（7ウ5）、かたき「難き」（2ウ2）、かな「仮名」（4オ9）、かなし「哀し」（15ウ1）。

【非語句頭例】（4例）

b. 心うかる「憂かる」（11オ8）、くらかり「暗かり」ける（52ウ8）。

c. は、かり「憚り」（37ウ6・46オ9）。

非語句頭例bの「心うかる」「くらかり」は、カリ活用形容詞語尾の頭である。資料①の「やさしかるへし」の類例である。

c 「は、かり」は、踊り字に続けて「可」の仮名を書くと「はか

り」と読まれかねないために「か」が選択された、と資料①で考えた。

よって、字体「か」は、語頭または語頭相当の位置で使用される仮名字体である、と言えよう。

③正保二年（一六四五）刊本『悦目抄』（国会図書館蔵本⁸⁵⁷⁻³¹）本資料でも、〈カ〉を示す基本字体は「可」であり、〈カ〉の86.7%を占める。「閑」「ケ」は、使用されていない。

表3

	語句頭	非語句頭	計
可	191例	521例	712例
か	96例	13例	109例
計	287例	534例	821例

本資料では、「か」の語句頭使用例が資料①②よりも多い。その例を一部掲げる。

かく「書く」（2ウ2・2・3・4・5・6・11ウ1・4・38オ1）、かな「仮名」（13ウ8・14オ4・41オ10）、かならず「必ず」（1オ3・6ウ1・11オ4・19オ1・19ウ2）、かなふ「叶ふ」（1ウ6・12ウ9・17オ2）。

非語句頭で使用される「か」13例は、左のものである。

a. 形態素頭（8例）

あ可しかね(14ウ9)、哥から(柄)(47ウ11)、有かたければ(39オ6)、しりかたき(5オ8)、たへかたく(49オ3)、みよかし(30ウ7)、はしらかし(1ウ5)、とてもかかくても(41オ4)。

b. カリ活用形容詞活用語尾頭(4例)

あさからす(54ウ1)、かたがるへし(1ウ2)、みくるしかるへし(39ウ10)、やさしかりける(49ウ11)。

c. 「は、かる」「憚る」(1例)

は、かる(41ウ7)。

本資料においても、非語句頭の「か」使用例は、右 a b c の三種である。

④ 〈カ〉使用実態のまとめ

以上、仮名字体「か」は、「下」に用いないという「悦目抄」に記された原則に適っている。

2. 〈ツ〉

①書陵部蔵室町中期写本『悦目抄』(150函734号)

表4

		語句頭	非語句頭	計
徒	つ	33例	124例	157例
30例		26例		56例

	川	津	計
0例	3例	66例	
5例	2例	157例	
5例	5例	223例	

本資料(ツ)の仮名表記は、語句頭と非語句頭とが、1対2.4程度である。

本資料において(ツ)を表記する仮名字体の中心である「つ」は、「下に不書」とされていたものの、非語句頭例は語句頭例の約四倍に達する。「つ」は、「下に不書」とは言えない。

一方、「上下を不分」とされていた「徒」には、語句頭例が多い。非語句頭例26例は、つぎのものである。

【助動詞「つ」の語頭】(6例)

云徒れは(43ウ6)、置徒れは(24オ7・24ウ6)、すへ徒る(17オ7)、みち徒らし(26オ6)、そんし／徒へき(18ウ6)。

【形態素頭】(8例)

思徒、く「続く」(11オ5)・思ひ徒、け「続け」(58ウ8・66ウ4)、ちか徒けん「近づく」(21ウ1)・ちか／徒けられぬ「近づく」(21ウ2)、よみ徒くし「読み尽くし」(48オ4)、申徒たへ「伝へ」(13ウ1)、な徒け「名付け」(51オ3)。

【行頭】(4例)

た／徒る「立つる」(22オ6)、たてま／徒り「奉る」(68オ4)、つかうま／徒りて「仕る」(64オ5)、ゆ／徒り「譲り」(69オ6)。

【その他】(8例)

く徒かふり「沓冠」(39オ3・40ウ2)、し徒く「滴」(27ウ7・46ウ3)、め徒らしけれ「珍し」(10ウ3)、い徒くにも「何処」(3オ5)、し徒らひつれ「設ひ」(17ウ6)、や徒す「襲す」(18オ1)。

「徒」が非語句頭で使用された理由を想定しがたい例(【その他】)は、五語八例に過ぎない。

「川」「津」は全体数が少なく、数の差が有意か否か不明である。ただし、「川」には語句頭使用例が無く、非語句頭例中に助動詞・形態素頭での使用例も皆無であることは、注目される。

②内閣文庫蔵室町時代写本『悦目抄』(特102-0011)

表5

	語句頭	非語句頭	計
つ	25例	115例	140例
徒	34例	22例	56例
川	0例	10例	10例
津	3例	3例	6例
計	62例	150例	212例

右表5も、語句頭と非語句頭とが、1対2.4程度であり、資料①表4と同傾向である。

すなわち、基本の仮名は「つ」であり、ついで「徒」である。

「つ」は非語句頭に例が多く、「徒」は語句頭に例が偏る。

「川」は、語句頭では使用されない。非語句頭の形態素頭例も、「おき川なみ」「沖つ浪」(39ウ1)のみである。⁸⁾

③正保二年(二六四五)刊本『悦目抄』(国会図書館蔵本857-31)

表6

	語句頭	非語句頭	計
つ	41例	108例	149例
徒	17例	21例	38例
川	0例	37例	37例
津	20例	11例	31例
計	78例	177例	255例

語句頭と非語句頭とが、1対2.7程度である。

〈ツ〉を表記する基本の仮名「つ」には、非語句頭使用例が多い。ただし、非語句頭例108の中に、「ちかつく」「近づく」のような複合語下部や助動詞「つ」・助詞「つ」の例が49例含まれる。これらを「上」の単位と認めれば、「つ」は語句頭90例、非語句頭59例となり、語句頭例が多くなる。しかし、その場合も、「下に不書」仮名字体とは認められない。

「徒」は、語句頭・非語句頭が1・2.7という〈ツ〉の全体比を勘案

すれば、語句頭に例が偏る。非語句頭に入れた21例には、「近づく」
 「名付く」等の複合語下位の語頭・助動詞「つ」の使用例が13例含まれる。これを語頭に算入すれば、語句頭30例・非語句頭8例となる。
 「川」は、本資料でも語句頭例が無い。非語句頭37例中の形態素頭
 例も、「おき川しら浪・おき川しらなみ」「沖つ白浪」三例と助動詞
 「つ」一例のみである。

「津」は、逆に、語句頭での使用例が多い。非語句頭例11例も、うち10例は、複合語下部の頭・助動詞・助詞「つ」の例である。

④ 〈ツ〉使用実態のまとめ

仮名字体「つ」は、「下に不書」の記述と異なり、「下」にも用いられている。

「徒」は、語句頭例に偏る。

反対に、「川」は、語句頭に全く用いられていない。「川」が語頭に用いられないのは、おそらく偶然ではない。「川」は、対象資料中にも、左の促音表記例を持つ。

資料② 「上手のふ川とせぬ事也」(35才8)、「二字も川てかへす
 事侍」(46ウ5)。

資料③ 「歌をは百首千首万首をも川てよみ侍るへし」(11才1)、
 「歌をも川てくわしく申也」(14才3)。

促音は、語頭に出現しない。そのため、促音表示に使用される
 「川」は、非語頭の仮名字体として運用されたものではなからうか。

以上、音節〈ツ〉は、『悦目抄』本文に記された仮名字体使用の原則に合致しない。

3. 〈ナ〉

①書陵部蔵室町中期写本『悦目抄』(150函734号)

表7

	語句頭	非語句頭	計
な	52例	61例	113例
奈	81例	247例	328例
那	19例	99例	118例
計	152例	407例	559例

右のとおり、語句頭・非語句頭が約1:2.7である。

ア. 「な」

【非語句頭例】(61例)

a. 「なり」助動詞」(31例)

あたりなり「仇也」(44ウ6・7)、かへよむなり(26才6)、まな
 ふへきなり(7ウ5)、噓なり(52才1)、讀なり(19ウ7)、字
 なり(20才5)、弟子なり(15才4)、優なる(61才1)、いふな
 る(7ウ4)、うたなる(23才5)、おほきなる(8ウ6)、とき
 は(常盤)なる(38才7)、へらなる(26才8)、秀句なる(59
 ウ5)、別なる(31才6)、無念なる(10ウ2)、こぬなるへし
 (18才6)、もちゐるなるへし(33才3)、文字なれ共(31才5)、
 鷹なれは(17才6)、道理なれ(54ウ2)、ことく／ならは(32
 ウ2)、かたき／なり(1才2)、もと／なり(19ウ1)、べし

と／なり(58ウ8)、儉約／なる(56ウ6)、荒涼／なるへし(10オ3)、まれ／なる(10ウ6)、大／なる(50ウ6)、難／なれ共(63オ6)。

b. 「など(等)」(16例)

遠情など(11オ5)、君かみのなど(28ウ2)、古哥など(48オ8)、舟など(22オ4)、哥など(46オ1)、みきはなど(55オ6)、めつらしけれなど(10ウ3)、まれ／なるなど(11オ1)、いへなど(47オ2)、いはぬ／など(46ウ8)、きくからに／など(29ウ2)、月かも／など(19ウ5)、候はす／など(42ウ2)、所／など(7オ4)、袖の／など(49ウ1)、する／など(31オ3)。

c. 「なむ[助動詞]」(4例)

たのまなん(38オ8)、哥をなん(57オ1)、となん(63オ3)、さまを／なん(5ウ3)。

d. 形容詞活用語尾頭(4例)

かひなくなん(6ウ8)、あちきなくなん(7オ2)、さうなく(27オ2)、さりげなく(60ウ6)。

e. 語中の形態素頭(3例)

取なして(48オ8)、つくりなす(35ウ4)、ねすなき(61オ6)。

f. 非形態素頭(3例)

か／なしみ(32オ8)、おなしきなり(28ウ7)、かな(仮名)(20オ8)。

右のとおり、「下に不書」とされる字体「な」の非語句頭例は、大部分、句中の語頭例または語中の形態素頭例である。行頭での使用

例が比較的多いのは、行頭を語頭から書き始めるためである。

語認定法に拘わらず「上」と認めがたい例は、fの三例に過ぎない。⁹⁾

付属語例abcを語頭に入れると、語頭103例、非語頭10例となる。

よって、字体「な」は、「下に不書」の記述に一致する。

書写者が認識していた単位は、「付属語・接尾語は直前の語と、接頭語は直後の語とともに一語句として採る」とした本稿当初の方針より短いものであった、と考えられる。

1. 「奈」

非語句頭での「奈」使用例247例の中にも、「な」と同じく、助動詞「なり・なむ」・助詞「など」・形容詞活用語尾頭・語中の形態素頭の例が含まれる。

しかし、「お奈し」「同じ」(17例)、「か奈」「仮名」(2例)、「か奈し」「哀し」(2例)、「む奈し」「空し」(2例)などの使用例が有り、「奈」は「上下」ともに使用されている。

ウ. 「那」

「那」の非語句頭使用例98例中にも、助動詞「なり・なむ」・助詞「など」・形容詞活用語尾頭・語中の形態素頭の例が見られる。

だが、やはり、「お那し」「同じ」(8例)、「み那」「皆」(十六例)、「か那し」「哀し」(3例)、「か那」「仮名」(2例)、「は那」「花」(2例)等が有り、「那」は、「下」での使用を避けられてはいない。

かえて、「那」の語句頭における割合が低いことに、注意される。

その語句頭19例は、「無し」(11例)・「成る」(2例)・「成す」(2例)・「なんくとして」(2例)・「名」(2例)であり、使用語に偏

りがある。

②内閣文庫蔵室町時代写本『悦目抄』（特102-0011）

表8

	語句頭	非語句頭	計
計	168例	431例	599例
那	4例	13例	17例
奈	157例	389例	546例
な	7例	29例	36例

ア. 「な」

「な」の全36例中、非語句頭に入れた29例は、左のものである。

（以下、紙幅の都合で、辞書見出し形を挙げ、例数のみ示す。一例のものは例数を省略する。）

- a. 「なり」〔助動詞〕（27例）。
- c. 「なむ」〔助動詞〕。
- e. 語中の形態素頭 「べらなり」〔助動詞〕。
「なり」「なむ」を一単位とすれば、「な」は「上」での使用例となる。「べらなり」の「なり」も、一単位と認識されていたかもしれない。
- イ. 「奈」

資料①と異なり、本資料での〈ナ〉仮名書き例の91%は「奈」で

ある。「上下を不分」使用されている。

ウ. 「那」

「那」の非語句頭13例は、「けらし那」（2例）・本懐那り・ゆくか那・お那し（2例）・か那し（2例）・かさ那る・すぐ那し・す那はち・と那り・み那月」であり、「けらし那」「本懐那り」以外は、語頭とは認められない。

語句頭の四例は、いずれも「那し」「無し」の例である（うつす事那し（2ウ7）・ゆくかたも那し（22オ1）・よしも那し（45ウ4）・あなちちに那し（47ウ6）。資料①の「那」語句頭使用例も、「那し」「無し」に集中していた。

③正保二年（一六四五）刊本『悦目抄』（国会図書館蔵本 857-31）

表9

	語句頭	非語句頭	計
計	174例	435例	609例
那	1例	54例	55例
奈	107例	262例	369例
な	66例	119例	185例

ア. 「な」

「な」の非語句頭119例の八割は、「なり」〔助動詞〕（61例）・「など」〔等〕（30例）・「なむ」〔助動詞〕（4例）の語頭使用例である。

また、語認定の基準とした『日本国語大辞典 第二版』で一語とされているために語中例となる左諸語の「な」は、形態素の頭である(接頭語と一纏まりとした例もここに挙げる)。

しらなみ「白波」(4例)、あぢきなし「形容詞」(2例)、べらなり「助動詞」(2例)、ねずなき「鼠鳴、いたづらなり」「徒なり」、いかなる「如何なる」、かひなし「甲斐無し」、せんなし「詮無し」、ほいなし「本意無し」、はかなし「儂し」、ひきなほす「引き直す」、うちながむ「うち眺む」、御なやみ「御悩み」。形態素頭とは認められないものは、次の四語五例である。

つた／なし「拙し」、おなじ「同じ」(2例)、おこなふ「行なふ」、ひな「鄙」。

よつて、字体「な」の用法は、本資料においても、「下に不書」の記述と一致する。

イ. 「奈」

〈ナ〉仮名書き例の過半数を占める「奈」は、使用位置に制約が無いニュートラルな基本字体である。

ウ. 「那」

「那」の語句頭使用例は、「那ひき」「靡き」けり」(50オ6)の一例である。

非語句頭使用全54例を、左に列挙する。

は那「花」(12例)・は那す、き「花薄」・さくらば那「桜花」、み那「皆」(9例)、お那じ「同じ」(7例)、か那らず「必ず」(3例)・か那らずしも「必ずしも」、わか那「若菜」(3例)、さ那がら「副詞」(2例)、か那「助詞」(2例)、か那「仮名」、か

那し「哀し」、あ那かしこ「あな畏」、し那「品」、す那はち「即ち」、は那す「離す」、は那る「離る」、は那す「話す」、は那ちとり「放鳥」、み那と「湊」、み那月「水無月」、やはらか那り「柔らかなり」、す那「為+助詞」。

「柔らかなり」「すな」は、語頭の使用例である。

しかし、この二例を語句頭例に加算したとしても、「那」の使用が語句頭において回避されていることは、明らかである。資料①②で例外的語頭使用例であった「那し」「無し」も、本資料では、「奈し」または「なし」と書かれている。

④ 〈ナ〉使用実態のまとめ

「な」は「下に不書」、「奈」は「上下を不分」使用されていた。しかし、「那」は、資料①②で語頭例が少なく、資料③は語頭での使用を意図的に避けていた。

三、結論

本稿の目的は、鎌倉時代中期成立とされる『悦目抄』に記された仮名文字遣い法が、『悦目抄』内において実践されているか否かを調査することであった。

調査対象の音節を〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉に定め、対象文献として、左の『悦目抄』写本二本と江戸初期刊本一本とを選んだ。

①書陵部蔵室町中期写本(150函734号)、②内閣文庫蔵室町時代写本(特102-0011)、③正保二年(一六四五)刊本。

結果は既述の通り、『悦目抄』に記された仮名文字遣い法と本文における仮名文字遣いとは、〈カ〉〈ナ〉において一致し、〈ツ〉では一致していなかった。

〈ツ〉における不一致の内実は、次のごとくであった。

仮名字体「つ」は、「下に不書」とは言えない。

仮名字体「徒」は、語頭での使用に偏る。

仮名字体「川」は、語頭では使用されない。

また、「那」は、資料①②で語頭例が少なく、資料③では語頭での使用が避けられていた。

以上、本稿の検討によって、『新撰仮名文字遣い』よりも成立の古い『悦目抄』においても、記された仮名文字遣いの原則に合う文字遣いを実践した音節が存することが確認された。

四、仮名文字遣いの歴史における本稿結論の位置づけ

本稿の対象とした音節〈カ〉〈ツ〉〈ナ〉について、『悦目抄』と『新撰仮名文字遣い』とに記された仮名文字遣い法の原則を対比すると、左のごとくである。

音節	仮名字体	悦目抄	新撰仮名文字遣い
〈カ〉	「か」	下に不書	下にか、さる
〈ツ〉	「つ」	下に不書	（記述ナシ）
	「徒」	上下を不分	（記述ナシ）

〈ナ〉	「川」	上下を不分	かしらにか、さる
	「な」	下に不書	下にか、さる
	「奈」	上下を不分	（記述ナシ）
	「那」	上下を不分	かしらにか、さる

『悦目抄』『新撰仮名文字遣い』ともに記述が見られる字体では、「か」「な」は一致し、「川」「那」は原則が相違する。

『悦目抄』で「上下を不分」とされた「川」は、『新撰仮名文字遣い』では第十四条「かしらにか、さるかなの事」に挙げられ、両者異なる。

しかし、既述のとおり、「川」は、『悦目抄』三本においても実際には語頭使用例は皆無であった。

また、「那」は、『悦目抄』の室町時代写本では語頭での使用例が少なく、江戸初期の刊本③では、語頭での使用が避けられていた。これは、「那」を「かしらにか、さるかな」とする『新撰仮名文字遣い』の原則および本文における使用実態に一致する。「那」の仮名文字遣い法が時代が降って変化あるいは徹底したもの、と解することができる。

『悦目抄』『新撰仮名文字遣い』に記された仮名文字遣い法の原則は、同時代の文献における仮名文字遣いの実態といかに合致し、齟齬するのか。各文献書写者は、何のためにそれらの仮名文字遣いを実践し、あるいはなぜ実践しなかったのか。

これらは、今後の仮名文字遣い研究の一課題かと思われる。

注

(1) 前稿同様、へ内は、音節を指す。「」で括る仮名字体と区別するための記号である。

(2) 土肥新一郎『新撰仮名文字遣』の「かしら」「下」——「か」
〈し〉〈つ〉〈な〉の変体仮名の使い分けに注目して——（『国語教育研究』第六十号、二〇一九年三月）。

(3) 資料②の「大方書違てあしかるへきかなの事」は、左のとおりである（資料③「大かたかきたかへてあしかるへきかなの事」の記述も同内容である）。

下にか、さる「加」

下にか、さる「つ」 上下をわかす可書「徒」「川」

下にか、さる「な」 上下をわかす可書「奈」「那」

(4) 植喜代子「藤原定家の変体仮名用法について」（『国文学攷』第八十二号、一九七九年六月）。

(5) 佐々木勇「正徹本『徒然草』の行末に見られる区切りへの配慮」（『論叢 国語教育学』14号、二〇一八年七月）。

(6) 小松英雄「日本語書記史原論」（一九九八年、笠間書院。141・142頁）。本稿の筆者も、右注論文において、「行末と単語（形態素）末とを一致させられない場合、行末・行頭に頻用しない仮名字体・仮名字形を用い、注意を促す。」表記例が正徹本『徒然草』に存することを指摘した。

(7) ただし、本資料中には、踊り字と、を打たない「可」の仮名

とをやや離して書写した「憚る」が四例存する。

は、可り（36オ5・38オ1）、は、可らす（36オ6）、は、可る（37オ6）。

(8) その他、他本で「おこつき」とされる箇所を「おこ川」（55オ8）とする不審例が有る。

(9) 「か／なしみ」は、行頭であるが故の使用例であろう。「おなしきなり」（28ウ7）は、三行前に「お那し」が有ることが影響しているのであろうか。また、「かな」「仮名」（20オ8）は、同行上に「奈」を使用しているために、重複を避けたものかもしれない。

(10) 注（2）土肥論文、参照。

（広島大学）